

タイ・バンコク都海外研修(タイジェスト)

～変わりゆくバンコク 変わらないバンコク～ 2023/3/12(日)-16(木)

天候(全期間を通して)
曇時々晴(25-32℃)

3/12(日) 11:00セントレア発-15:10(日本時間17:10)バンコク着-空港から(専用車で)チャオプラー川沿いホテル
宿泊ホテルは、活気戻る国際都市バンコクの観光名所、アジアティークザリバーフロントの近く。
ゆっくり食べ歩きを楽しみたい観覧者vs高速で4周する観覧車(500B=約2000円)



3/13(月) 9:00ホテル発-(船で)チャオプラー川北上しワットアルン、ワットポー-(地下鉄で)スクンビットのホテル
ホテル近くの船着場からワットアルンへの30分の船旅(16B)。操縦士の横にはその子供。タイの民族衣装コスプレ体験(300B)。
伝統的寺院vs近代的建物、生活感漂う船vs無機質な地下鉄。その全てを包み込む、横臥し微笑むワットポー涅槃仏。



3/14(火) 9:00ホテル発-(BTSで)アソーク駅からエカマイ駅-(徒歩で)クロンイ・スラム地区-チットロム駅-スクンビットのホテル
シーカー財団が支援するバンコク最大のスラム地区。カンボジアからの移民約10世帯住居内の想像を絶する生活。
地区内の緊急時の結束力は固い。経済振興を狙う側が、敬虔な「信仰心」に退去命令を出せるのか。
子供の将来を考えると学校の存在は不可欠。帰りに利用したソテウの荷台を吹き抜ける風が心地よい。



3/15(水) 9:30ホテル発-(徒歩で)JICAオフィス-(専用車で)ノンタブリー県保健局管轄デフケアセンター-空港へ
午前中はJICAオフィスでブリーフィング。タイのここ10数年の世論調査で日本は最も信頼できる国の1位であると。
午後のデフケアセンターは県保健局管轄だがコミュニティで運営。テレビ取材があり本校生徒が代表して料理調理。



3/16(木) 00:05バンコク発-7:10(日本時間)セントレア着

研修旅行は家に着くまでが旅行、ではない。自分の次の行動にどう生かすかが大切。人生の旅は長い。

1 日目 3 月 12 日 (日)

初めての海外旅行！

伊藤 瑠香

楽しみに前夜は十分な睡眠がとれなかった。セントレアに 8 時半集合。ポケット Wi-Fi を受け取るために早めに空港に到着。受け取りに少し戸惑ったが、初めての経験でわくわくした。参加者が集まりはじめた頃、校長先生や学年主任の伊藤先生、担任の柴田先生が見送りに来てくださった。ただの旅行ではなく、研修旅行に行くのだという実感が改めて湧き、気持ちが引き締まった。私の母も見送りに来てくれて、とても安心した。



飛行機に乗る前にパスポートを見せたり、荷物を検査されたりとあわただしい。スーツケースの重さは 20kg までの制限があった。出発時にすでに 18kg もあり帰りは大丈夫かと心配になった。荷物検査では、機内持ち込み用のカバンに入れたモバイルバッテリーを厳しく検査され緊張した。

飛行機内は 3 席あるうちの真ん中の席だった。隣は共に日本人男性だった。機内食の時、キャビンアテンダント (CA) の英語がわからず、隣の男性に教えてもらった。CA は、「辛い豚肉とお米か、辛くない鶏肉とパスタか」と、おっしゃっていたらしい。私は辛いものが苦手なのに、危うく辛い豚肉を頼むところだったので助かった。また、人生で初めてズッキーニというものをここで食べた。

国際都市バンコクに到着！

原野 香子

機内食を食べ終えて約 3 時間でバンコクに到着。飛行機を降りるとすぐ、もわっとした熱気が来たのでタイに着いたのだな、と実感が湧いた。

入国審査では、パスポートを提出し顔認証をしたりタイ国内で犯罪をした時のために指紋を取ったりした。また滞在期間や旅の目的などを聞かれ、それに英語で答えるのに緊張した。



入国審査を終えると次は預けておいたスーツケースを受け取った。その時に日本円をタイのお金パーツに両替した。待ち時間を利用して空港のトイレに行ったのだが、想像していたより綺麗で驚いた。

スワンナプーム空港から 1 時間ほどバスに乗りホテルに着いた。ホテルはバンコクの大きな商業施設であるアジアティークの目の前にあった。ホテルに入ると王様を祀る祭壇のようなものがあり日本との文化の違いを改めて感じた。部屋はそこまで広くはなかったが居心地がよかった。部屋の片づけを終え、アジアティークへ夕食に出かけた。そこまでの道がとても汚く、びっくりした。歩道橋の階段にはジュースの缶やお菓子のごみなどがたくさん落ちていて匂いもきつかった。久しぶりに長時間外を歩いた気がして暑さで汗が出てきた。しかしアジアティークに着くと全てがとてもキラキラしていて感動した。2 時間程度自由時間で、オープンなレストランでご飯を食べたりショッピングをしたりした。そのなかで印象に残っているのは、お土産としてとてもかわいくていい香りのする石鹸を買ったり、マンゴ・アイスクリームを食べたりして短時間ではあるが異国の生活を楽しんだことだ。

ホテルへの帰り道コンビニ (なんとセブンイレブン!) に寄り、次の日に備えてペットボトルの水を買った。ホテルに戻り、シャワーを浴びた。このホテルは浴槽がなくシャワーのみ。またシャワーの水圧が弱くて泡を流すのも髪の毛を洗うのも大変だった。その日は一日 26 時間楽しめた満足感に浸りながら早めに就寝した。

2日目 3月13日（月）

ワットアルンでは民族衣装！

予定の時間になっても朝食が部屋に運ばれてこない、その朝食も独特な香りで、朝から良くも悪くもタイらしさを感じる1日のスタートだった。

ホテルを出て、チャオプラヤー川の船着場に向かった。北にあるワットアルン、ワットポーがこの日の目的地だ。ボートに乗り込むと、チケットを売ったり操縦したりする人たちは仕事中とは思えないほど楽しそうに談笑していた。そのスタッフの子供たちと思われる2人が操縦席横にいて、「えっ、大丈夫なの？」と思った。このような些細なところでも日本との違いが感じられた。そのボートは思ったよりもスピードが出ていて水しぶきを上げながら走る。つき当りの風景は、たちまち両側へ分かれるようにずんずん目の前へ展開してくる。顔に当る川面の風、足の下に躍るモーターの動揺 — 私たちはほとんど有頂天になった。スリルがあってアトラクションみたいで楽しかった。

そしてお目当てのワットアルンに到着し、私たちはタイの民族衣装、シワーライを着て、今度は自分たちが肩で風を切りながら建物を見学した。シワーライは綿やシルクから作られた長方形の美しい布を胸に巻いて着る「サバイ」と、筒状のスカート「パ・ヌン」から成る。このシワーライは片方の肩を露出するもので、ミニスカートなどの露出の多い服装は控えるように言われていたこともあり、ここでそのような衣装を着ることができると少し驚いた。それぞれのイメージに合った色の衣装を身にまとい、他の観光客にお願いして写真を撮影してもらい、なかには私たちと一緒に撮ってくれと言う人もいて、いい思い出となった。また、ここで初めて先生に頼らず、自ら英語でコミュニケーションをとる機会ができ、海外の方と話すのは緊張したけれど、楽しく乗り越え積極的に話すことができた。

洞口 真桜



Make Me Mango へ！

その後、渡し船に乗ってワットポーがある向こう岸に着く。着くとすぐ昼食に“Make Me Mango”という店に足を進めた。店内はとてもおしゃれで、写真映えする雰囲気が漂う。カオニャオマムアンとマンゴーアイスなどがセットになった看板メニュー「メイクミーマンゴー」を注文し、皆で分け合って食べた。これは、ココナッツミルクで炊いたもち米（カオニャオ）にマンゴー（マムアン）を添えて食べるデザート。日本ではなかなか味わえない味わい深い経験になった。

昼食後には、大通りをはさんだ反対側にあるワットポーへ。この広大な寺院の敷地には、色鮮やかな塔が点在している。ここでは各自が自由に見て回ることになり、まず私は、ワットポーの一番の目玉である、寝釈迦仏（涅槃像）を見にいった。寝釈迦仏のいる仏堂に入るとすぐに姿を見ることができ、その大きさに圧倒された。頭からつま先まで46メートル、高さも15メートルあるそう。足の裏を見ると、108の絵が描かれていて、これらの絵は人々に幸福をもたらすと言われている。本尊の台座にはラーマ1世の遺骨が安置されているらしい。日本からの観光客も多く、さまざまな場所で日本語の表記を目にした。

ワットポーを見学した後は、最寄りの地下鉄サナムチャイ駅からスクンビットに向かった。

水谷 舞耶



3日目 3月14日（火）

初めて実際に見たスラム地区！

「スラム地区を訪問する」と最初に聞いた時ふと湧き上がった感情は「怖い」だった。私にとってスラム地区のイメージは「危険な場所」で、行ったら何かされるのではないかと不安でいっぱいだった。

実際に訪問してみると家の周りや道には多くのゴミが捨てられていたり、ドアがない家や床がぼろぼろになっている家があったり、私には住むことが到底想像できない場所が広がっていた。しかし、このような環境で生活している人は世界的に見ても少なくないのは確かだ。今まで写真や動画でしか見てこなかったスラム地区の風景を実際に見てみると、同じ地球上に住むにもかかわらず、違う世界に来たみたいで大きな衝撃を受け虚脱感に陥った。

スラム地区を視察した後、この地区を支援しているシーカー財団の方が私たちの質問に答えてくださった。その中で驚いたことは、このスラム地区に住んでいる人たちはお互いの信頼やモラルがあるからこそ成り立っていること、家や道の周りには大量のゴミも過去に比べれば減っているということだ。また、火事などの緊急時には自分たちで協力して消し止める、とも。このように自分の目で見て、その場で現地の方に話を聞くからこそ知ることができた発見が沢山あり、大きな経験となった。

私は、大学で国際関係の観点から国際問題について学びたいと思っている。したがって、今回の体験を大切に、将来少しでもこのような国際問題の解決に貢献できるようにこれから励んでいきたい。

三輪 咲来



見たことがない景色、これがタイか！

シーカー財団から、ソンテウという地元の人たちしか利用しない小型トラックの荷台に乗ってエカマイ駅に、そしてスカイトレインでバンコクの中心街にあるチットロム駅に着いた。そこから歩いて巨大ショッピングセンター“BIG C”へと向かった。大きな通りには自動車と同じくらいの多さのバイクが道路を走っていた。いたるところに屋台もある。「タイってこんな感じなのだ」と異国にいることを改めて感じた瞬間だった。

街中では日本では見かけないような高さのビルがたくさんそびえていた。まずは“BIG C”の中に入って驚いた。店内は広く、大きなカートにまとめ買いのお菓子を詰め込んでいく旅行者がたくさんいた。自分も買いはじめると欲しいものばかりで、すぐにカートいっぱいになった。しかし買ったお菓子は量のわりには安かった。日本にあるコストコみたいだなとふと思った。

向かい側にあるショッピングモール“Central World”には、世界で2番目に大きいと言われるスターバックスが入っていた。いろいろなタイプの座席があり、奥には会議室のようなところもあるそうだ。パソコンを持ち込んで作業している人の姿もあった。

学校の地理の授業では、「タイは開発途上国だ」と習った。が、私は実際にタイに行って、中心部に関しては日本と同じぐらい発展しているのではないかと、ひょっとしたら日本よりも充実している所もあるのかもしれないと思った。一方で、スラム地区との大きな差を感じていた。

太田 久瑠未



4日目 3月15日（水）

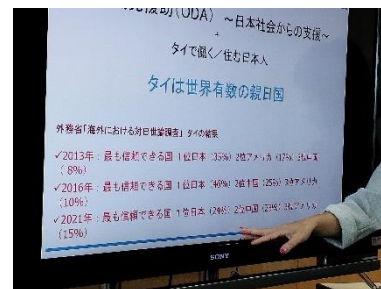
JICA タイ事務所でフリースペイク！

JICA 事務所は、ホテルから5分ぐらいの Exchange Tower にある。タワーの入口に着いたところでこちらから連絡すると中山様が出迎えに来てくださった。本来ならば、パスポートを読み込んで入り、出るときもそれと照合するとのことだが、中山様のお導きによりすんなりと入れてもらった。31階にあるオフィスの入り口では、現地スタッフの方々は皆様、暖かく迎えてくださった。31階の窓から見える景色はこれまでとは異なるものだった。

最初に、中山様から JICA の活動やタイの現況についてのお話を伺った。タイにとって日本は信頼度が高い国であるということが改めて理解できた。また私は、「相互依存」という言葉の意味が今までよくわからなかった。この時間で、私は「国内外での相互依存」について理解できた。バンコクは、都会という言葉が相応しく大いに発展しているが、その道路整備などは実は移民の方々が行っているという状況を知り、スラム地区と関連付けて相互依存ということに対する知識を深めることができたのである。高校生の私たちにわかりやすくお話をしてくださった中山様、佐藤様に感謝したい。

実際に自分達がバンコクの中心部だけでなくスラム地区をこの目で見たからこそ、理解できるものがあると気づき、ここで改めてタイに来た甲斐があったと感じた。そしてこの気づきを与えてくれたこのオフィスに来ることができたことを誇りに感じた。

余郷 友乃



ノンタブリー県デイクアセンターでの2名の隊員の活躍！

デイクアセンターでは2名の隊員が日本の代表として活躍をしていた。1名は介護士、もう1名は栄養士として。まず、デイクアセンター到着後は栄養士の隊員の方の活動の視察をした。本校の生徒1人もオムレツ作りに参加した。そのとき私は隊員の方の語学力に驚かされた。一つ一つの材料や調味料をタイ語で紹介し、まるで料理番組のように和やかな雰囲気でおムレツ作りが進められた。この日午前の JICA 海外協力隊の説明の際、派遣前に約 70 日間の訓練があり言語

の勉強をするという情報を得ていたが、それでもこれだけ喋ることができるのはすごいと思った。次に介護士の隊員の方の活動の視察をした。介護士として働く人の中でもそれぞれ役割があり、服の色で分けられているようだった。これまた午前の JICA オフィスで、タイでも高齢化が進んでいるということを知っており、また、デイクアセンターで働く方のお話の中でもノンタブリー県の人口の 20% が高齢者であるということも知った。私はタイに来る前、「タイは開発途上国」という認識だった。そのため、高齢化が進んでいるという感じはしなかった。しかし、この日お話を聞いてタイの認識が変わった。タイは開発途上国ではなく中進国であるということだ。この後の質問で2名の隊員に質問タイムがあった。その中で「大変なことは何か」という質問に対して、タイの方の介護の知識は思ったよりも多く、自分にできることは何かあるのかと考えたとおっしゃっていた。日本にいと、タイは日本よりも発展していないと思ってしまいが、知識や技術は日本に劣らず発展していて高齢化も進んでいることがわかった。この1日を通して日本がタイを支援するという関係ではなく、互いに支援し合っていくという新しい関係を築き始めていることを知ることができた。また、日本の代表として異国の地で活躍をする2名の隊員のすごさも間近で見ることができ、私自身に大きな刺激となった。

吉川 凜胡

